

「順天堂大学の創始者」

佐藤尚中



佐藤尚中像

佐藤尚中は文政10年（1827）に小見川藩医（1827）に山口甫僊の次子として内浜に生れました。山口家は代々内田藩医を務め、父甫僊は潮来の北城家から養子に入った人で、母エンは新浜の田村家から嫁ぎまし

た。尚中は幼名を竜太郎、成人後は舜海と名のりました。少年時代から学問に優れ、11歳で上京して寺門静軒に漢学を学び、鳥羽藩医安藤文沢に医学を学びました。天保13年（1842）、

16歳の時に文沢の薦めで、名医として評判の高かった佐藤泰然の和田塾に入門し、蘭方医学を学びました。翌年、佐藤泰然は老中堀田正睦の招きで佐倉に移り、西洋医学を教授する順天堂を開きます。舜海は順天堂で頭角を現しましたが、嘉永2年、22歳の時に母、1年後に父を亡くします。家督を継ぐべき兄、甫仁は病弱なため、小見川藩は舜海を後継者とする意向を示し、舜海は生家と医学修業と二者択一を迫られ悩みます。舜海は弟、星海の成人を待つて山口家の相続者となります。

佐藤泰然は舜海（このころに尚中と改名）の卓越した能力を認めて嘉永6年（1853）に養子縁組をして後継者と定めます。この時尚中は27歳で、すでに妻サダを迎えていました。長崎で西洋医学を学ぶ

万延元年（1860）に西洋医学を学ぶため長崎へ向かい、約1年間にわたって医学の学習に励みます。指導にあたっていたオランダ軍医ポンペは「日本の未熟な外科医の中に、尚中のような優れた医師がいる」と賞賛しています。明治2年（1869）、尚中は新政府から出府命令を受け、ドイツ医学を導入するために大学東校（後の

東京大学医学部）の主宰者となり、翌年には大典医に任ぜられて明治天皇の侍医となりました。明治4年には、大学大丞兼大博士大典医に任命されますが、いくつかの理由があり明治5年にその職を辞します。尚中はこのころの奔走と資金の借入など心労が重なり、肺結核を発病し、7年後の明治15年大咯血をして死亡、享年56歳でした。遺骨は谷中墓地に葬られました。

谷中墓地の入り口に、尚中の1周忌に建立された高さ6mの顕彰碑があります。これは全国の門弟350余名の醵金によるものです。そして地元内浜の出生地は山口家から寄附され、郷土の医聖尚中の偉業を後世に残すべく、昭和11年に香取郡医師会により誕生地記念碑が建てられ「千葉県指定史跡佐藤尚中誕生地」内浜公園として地元の人々の憩いの場となっています。



記念碑が建てられている内浜公園